

雪国の魅力発信プロジェクトに関する一考察 ー沖縄の人々に上越の雪を届ける活動についてー

仙田健一＊1 那須洋平＊2 金子秀史＊3

1 はじめに

実践校の上越教育大学附属中学校（以下、附属中学校）が位置する上越市は、新潟県の南西部に位置する。新潟県内で、上越市は、新潟市、長岡市に次いで第3位の市域（973Km²）と人口（17万9千人）を有する（2024年9月現在）。上越市と表記した場合は市域を示し、上越地方と表記した場合は、新潟県における上・中・下越のことであり、上越市、妙高市、糸魚川市が属している。



図1 冬の高田城址公園の三重櫓

附属中学校の校舎は、高田城址公園内（図1）にあり、江戸時代には高田城、明治時代には十三師団が招致された場所に位置している。

上越市高田は古くから豪雪地帯として知られ、雪が降って道が見えなくなった江戸時代には「この下に高田あり」という高札が出たほどである。2021年は、35年ぶりの大雪となり、1日の降雪が103cm（積雪198cm）となった。一方、上越市高田には、スキー場や酒、味噌、麴といった雪国の特徴的な文化がある。また、雪国の知恵である現存する雁木は約16kmあり、日本一の長さを誇っている。このように雪と共に暮らしてきた歴史や文化が上越市高田にはある。

これに対して、中学生にとって、雪は日常の一部であり、「雪があると歩くのに不便」「除雪が大変」「雪が降ることは当たり前」であると感じているようである。このように感じるのは他の地域と比較したり、「魅力」を感じたりする場面が少ないからではないかと考えられる。

そこで本研究では、上越の特色である雪の魅力を実感する活動を行うことで生徒がどのように変容するのかを明らかにすることを目的とする。

2 プロジェクト立ち上げの背景

附属中学校は、中学校独自の立場から研究を行い、地域の教育現場に寄与できるように実践を積み重ねてきた。また、伝統的に地域に出掛け、地域の文化や遺産を追求したり、地域の人々とともに考え合ったりする生徒の姿を大切にしてきた。

このような地域を学びの場とする活動を続ける中で、2024年2月下旬に修学旅行で沖縄県へ訪問する。沖縄県では観測史上数回しか降雪を記録しておらず、雪を見たことがない人が多い。そこで沖縄県の人たちに雪を届けることで、雪像を作ったり、文化交流を実現したりすることを目指した。そして、雪を届けるまでの計画を以下のように設定した。

2023年6月	上越魅力発見ツアーの企画立案
2023年10月	上越魅力発見ツアーの実施
2023年11月	修学旅行先での上越地方の魅力発信のための企画立案
2024年2月上旬	スノーキャンドルで雪の魅力の発信
2024年2月下旬	沖縄修学旅行で糸満市の小学生に雪を届ける活動

上越魅力発見ツアーでは、全国の教育関係者に向けて、附属中学校の生徒がツアーガイドをしながら、上越市内の施設やイベントを案内する活動である。

ツアー当日（2023年10月21日）は全国や市内から参加者26名が集まった。生徒が案内するバスツアーでは、「日本のワインの父」と呼ばれる川上善兵衛が創業した「岩の原葡萄園」や、旧陸軍高田第13師団第3代師団長・長岡外史中将の邸宅である「旧師団長館」を案内したり、高田本町商店街の商品を販売したりした。

そして、同日に高田本町商店街で開催された「越後・謙信SAKEまつり」に案内したり、同イベントで雪を沖縄に届けるプロジェクトの宣伝活動を行ったりした。中学生によるツアーへの参加者には、上越市の魅力を伝えることができた（詳細は、仙田健一・草間啓・金子秀史「中学生による上越魅力発信ツアー：教育研究協議会と上越の歴史と文化、食をつなぐ」北陸地域づくり協会『北陸地域の活性化』に関する研究助成事業論文集28号、2023年、pp.31-36を参照）。

3 スノーキャンドルの実施

沖縄県に雪を届ける前に、生徒自身が雪の魅力を感じることができるように、雪の中の美しい光景を発信する

スノーキャンドルの活動を企画した。キャンドルケースは、光が反射して広がるようにアルミホイルを巻き、中央から光が見えるように隙間をあけた。全校生徒で協力しながら、キャンドルを入れる約 6000 個のキャンドルケースを作成した（図 2）。



図 2 キャンドルケースを作成する生徒の様子

また、事前に保護者へキャンドルケースに貼るシールを配り、メッセージ書きへの協力を呼びかけた（図 3）。加えて、当日に現地でスノーキャンドルに参加できない人のために YouTube でライブ配信を設定した。

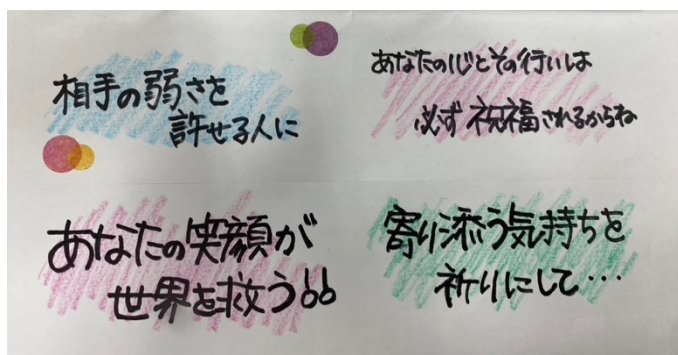


図 3 紙コップに貼る保護者から寄れたメッセージ

そして、広報活動として、地域や保護者から参加者を集めるためにチラシを作成し、高田本町の商店や保護者に配布した。そして、感染症等の影響で変更や延期となり、当日（2024 年 2 月 14 日）は以下のような計画で進行することとなった。

- | |
|--|
| <p>(1) 行事名「発プロジェクト～上越の魅力を発見・発酵・発信～」</p> <p>(2) 目的
平和を願うキャンドルアートを仲間と協力して作成し、身近な地域に雪の魅力を発信する。</p> <p>(3) スノーキャンドル</p> <p>① 点灯開始宣言 ※セレモニー開始 17：00
※日没 17：21</p> |
|--|

- | |
|--|
| <p>② 実行委員長の言葉</p> <p>③ キャンドルアートを見ながら「青葉の歌」を歌う
合唱開始 17：50～
合唱：2 年生</p> <p>④ 生徒下校 18：00
※キャンドルの点灯 18：30 まで</p> |
|--|

最初に、参加生徒全員でキャンドルを配置した。配置が終わると代表生徒が点灯宣言を行い、キャンドルに火を灯していった。点火には、40 分ほどの時間が掛かった。合唱前に実行委員長の生徒から、「2024 年は能登半島地震、ウクライナ侵攻、パレスチナ問題といった日常の平和が脅かされる事態が起きた。平和の大切さを感じながら行動したい」という話があった。未来を生きる当事者である生徒が「平和の火」を燃やし続ける願いを込めて、スノーキャンドル 6000 個の前で「青葉の歌」を歌った（図 4）。



図 4 キャンドルを見ながら歌う生徒の様子

中学 2 年の生徒 100 名と保護者や地域の方など 100 名が雪の中で揺れるキャンドルの火の幻想的な世界を見て、感動する姿があった。生徒は以下のような感想を記述した（図 5）。

- | |
|--|
| <p>・【生徒】初めて、このプロジェクトを聞いたときは、6000 個のキャンドルを並べ、火を灯すのは現実的に簡単なことではないと思っていた。それと同時にできたらすごく感動するし一生の思い出になると思った。準備でキャンドルを並べる作業は、真っ直ぐに並べるのが大変で思ったより進まなかった。しかし、真っ直ぐの方が絶対綺麗だから頑張ろうと思い、ひたすら並べた。顔を上げると、いつのまにか校舎の周りにキャンドルがたくさん並んでいて驚き、点灯する前からワクワクした。火を灯したキャンドルは美しく、幻想的な光景でとても感動した。初めての学年合唱も、私は屋外で歌ったことはなく、貴重な経験となった。青葉を歌いながら、オレンジ色の景色を見て、自分の中で平和への思いが大きくなっていくのを感じた。修学旅行は、まだ実感がわかない行事だが、沖縄で平和学習をするときにスノーキャンドルで込めた平和への思いを思い出しながら学習できればよいと思った。</p> <p>・【生徒】紙コップにシールを貼っている時、平和への願いや、戦争を許さない気持ち、震災の復興を願う気持ちがこもっていると感じ、丁寧に貼るように心掛けた。また、点火をするときも暗くなっていくたびに灯火が明る</p> |
|--|

くなっていて、人々の願いが灯されたと思った。合唱では言葉を伝えることを意識して歌った。直前に少し声を出していたので良いコンディションで歌うことができた。正直、正面に人がたくさん並んでいたのと、歌うのに集中していたのとでキャンドルアートを見ながら歌うということはあまり意識していなかった。しかし、YouTube のアーカイブの動画を見て、キャンドルアートへの想いが歌声によって誰かに届いていたらいと感じた。現在の高校1年生の先輩が私たちと同じ中学2年生だった頃から、ロシアとウクライナの戦争は起こっていて、戦争が長く続いてしまっているということが現実としてある。今年の能登半島地震で自分自身が想像できないほど辛い思いをしている人もいる。自分たちがすることはほんの小さなことかもしれないが、様々な人の思いが伝わるための一つのきっかけになればよい。

また、参観した保護者や地域の方から以下のような感想があった。

- ・【職員の家族】とても綺麗でした。たくさんのキャンドルで見ええがあった分、準備や片付けも大変だったことと思います。温かいキャンドルの炎を見て、平和への祈りや(ほんの1ヶ月前に自然災害があり)今こうして安心して過ごせる日常が幸せであることへの感謝も改めて感じることができました。校内に留まらず地域を巻き込んで今回のイベントを行ってくださり、ありがとうございました。
- ・【保護者】キャンドルの明かりが、今どきのLEDではなく、灯す火だったので、たくさんの明かりのゆらめきが、平和活動に対する、生徒の皆さんの優しさ・気持ちが現れていて、素敵な空間でした。
- ・【保護者】スノーキャンドルも合唱も素晴らしかったです。沖縄でも雪国の魅力をたくさん発信して、楽しく充実した修学旅行を経験してください。
- ・【地域の方】足を運ぶことができなかったのですが、YouTube配信より応援させていただきました。雪の中に輝くキャンドルの美しさと、中学生の皆さんが心をひとつにして歌う青葉の歌に、涙が止まりませんでした。中学生生活では、嬉しいことも、悲しいことも、悔しいことも、またどうしようもなく思い悩んで、苦しいこともきっとありますよね。それでもこうして仲間と本気で歌い合い、今という時間を必死に生きている皆さんは、心からカッコいい。“きらめけ 青葉よ” 私には、“青葉” が皆さんの姿に重なります。これからも、中学校生活という一度きりの時間を、思いっきり生き抜いてください。心から応援しています。
- ・【地域の方・小学生】スノーキャンドル、青葉の歌きれいでした。どうしてスノーキャンドルと平和がつながるのかわからなかったのですが、調べてみると、全国でもキャンドルで平和へ祈りを行っているのだと初めて知りました。キャンドルがウクライナの人にとどいて戦争が早く終わるといいなと思いました。

このような保護者、地域の方から応援の声が寄せられ、生徒はさらに意欲を高めていた。この様子は、新潟日報(2024年2月16日)と上越タイムス(2024年2月16日)に紹介された。

上記の生徒の様子や感想、スノーキャンドルに参加した地域の人や保護者の感想から雪が照らすキャンドルの明かりの美しさを感じたことを読み取ることができる。



図5 校舎屋上からのスノーキャンドルの様子

そして、同時に令和6年能登半島地震災害による義援金を集めた。寄せられた義援金19,786円を、日本赤十字を通して、被災地に届けた。また、上越タイムス(2024年3月8日)に、その様子が紹介された。

4 沖縄に雪を届ける活動

2月下旬に実施する沖縄修学旅行に向けて、雪を届ける活動の資金を集める方法を考えた。この活動を支えるために、クラウドファンディングという意見が生徒から出され、雪を沖縄県に届ける資金を集めることとした(生徒は、2023年2月に実施した経験がある)。このクラウドファンディングでは、交流がある高田本町書店街のお菓子や発酵食品、上越魅力発信ツアーでお世話になった岩の原ワインを返礼品として設定した。

実施したクラウドファンディング自体は、150万円を設定金額としたが、68人の支援者61万7000円で終了した。全ての活動が終了後に生徒からの感謝のメッセージを添えて、返礼品を発送した(図6)。



図6 クラウドファンディング実施後の生徒の様子

クラウドファンディングの支援者からは以下のような

応援の声が寄せられた。

- ・インターネット技術の目覚ましい進歩により、私たちは多くの情報に、いつでも、どこからでも、瞬時にアクセスできるようになりました。嗅覚や触覚を伝える研究もなされているようですが、やはり実物に触れられるということには貴い価値があります。恐らく本物の雪を見たくも触ったこともない沖縄の小学生。彼らが感動し、心を動かされ、今後の人生において何らかの刺激を受けることがあれば幸いです。そして、我が母校の後輩たちが多くの学びを得られることを願っております。
- ・昨年度に引き続き、魅力的な活動を継続して取り組んでいる姿がとても素敵だと思います。自分たちの思った通りにいかないときもあるかもしれませんが、自分たちのやりたいことを、やりたいときに、やれるだけやった経験は、きっとかけがえのない財産になると思います。仲間と取り組める貴重な経験を、楽しみながら進めてください。皆さんの活動を、これからも応援しています。

沖縄修学旅行に向かう前日に、生徒や保護者、職員からボランティアを募り、雪の発送作業を行った。2024 年は、暖冬で、上越市内にほとんど雪が残っておらず、雪を求めて上越地方の妙高市へと移動した。たくさんの参加者であつという間に雪を発泡スチロールに詰める作業が終わり、雪を乗せたトラックを見送った（図7）。平和の尊さを学ぶとともに、雪国の文化を体験してもらう決意を固めている生徒の姿があった。



図7 雪を箱に詰める生徒の様子

修学旅行では、沖縄県宮城島のビーチで念願のプロジェクトを実施した。うるま市立南原小学校1年生を招き、交流を行った。沖縄県の小学生は届けられた雪を見て驚き、雪に触ってみると「つめたい」と声をあげた。初めての体験に喜ぶ様子があった（図8）。

そして、交流活動では、雪国と南国を繋ぐ象徴として、沖縄の小学生と共にビーチで雪だるまを作る「コンテスト」を行った。その中で、シーサーを模した雪だるまや、海藻や貝殻でデコレーションされた雪だるまなど、創意

工夫し、作成した。生徒は小学生のアイデアを聞いて実践するなど、優しくフォローしながら活動した。ビーチに思い思いの雪だるまが並んでいる光景は、互いにとって思い出に残るものになった。

その後、中学生は平和学習の象徴として、「青葉の歌」の合唱を披露した。また、小学生からはサングワと呼ばれる手作りのお守りをもらい、別れを惜しんだ。



図8 沖縄のビーチで交流する生徒の様子

そして、生徒は以下のような感想を記入した。

- ・【生徒】雪を初めて見たり、触ったりする子もいるから、自分たちの当たり前は沖縄の小学生にとっての当たり前ではないことや、上越の人と沖縄の人の違いを感じることができた。冷凍で運ばれた雪はとても硬く、沖縄の小学生のイメージは本物の雪とは違うかもしれないが、楽しそうにしてくれて嬉しかった。もしかしたら雪に触れるのは何十年後になってしまうので小学生にとって良い経験になったのではないかな。
- ・【生徒】南原小学校の小学生は、初めて会ったし年齢も住んでいるところも違うけれど、一緒に雪だるまを作って、仲良くなれた。違いはあっても仲良くなれる。互いの「違い」が素敵で、強みで、面白いと思った。雪だるまは沖縄では作れない。新潟では雪だるまに海藻や海岸の砂を飾りつけることはできない。沖縄に雪を届けて、南原小学校の小学生と出会えたからあの雪だるまができた。コラボレーションって新しくて面白いと感じた。

5 おわりに

生徒は、二つの活動を通じて、「雪」に対する新しい視点を発見し、地域ごとの特色や違いを実感した。また、自分にとって「当たり前」のことが、他の地域にとっては「当たり前」ではないことを認識し、上越という地域と雪が自分たちのアイデンティティの一部であることを改めて感じていた。

このように上越地方における「雪」を活用した学びは、生徒にとって地域への理解と誇りを深めることに繋がり、非常に高い教育効果があるといえる。